

所 報 研究所だより

教育・しまんと

★本年もよろしくお願いします。

新しい年は、昨年と同様に温かく穏やかな幕開けとなりました。新型コロナウイルス感染症は、昨年の後半から再び増加傾向にはなりましたが、これまでのような行動制限はなく、年末・年始も全国的には人の流れも多かったのではないかと思います。

本県の日々の感染者数は、多少の増減はありますが、常時三桁から四桁の状態が続いています。

完全に感染が終息することは見通せませんが、感染したとしても重症化しないように、感染リスクを最大限抑さえこんでいけるような対策を、一人ひとりが心がけていくようにしましょう。

さて、各学校におかれましては、一年の締めくくりの学期を迎えました。小学6年生にとっては、6年間のまとめの学期であり、中学校生活に向けてのジャンプの時期でもあります。

また、中学校3年生にとっては、義務教育9年間の締めくくりの学期であると同時に、「進路決定」の重要な時期でもあります。

児童・生徒一人ひとりが、それぞれの学年のまとめをしっかりと行い、明るい希望をもって、何事にも「チャレンジ」してほしいと思います。

さらに、それぞれの学校におかれては、本年度の教育活動の検証・集約及び次年度へ向けての青写真を描いておられることと思います。

成果の継承と課題克服に向けて、全教職員一丸となり「ワンチーム・チーム学校」で、取り組んでいきましょう。

令和4年度
NO. 7

発行 四万十市教育研究所

四万十市国見 222 番地
Tel/Fax (0880) 37-2817
ふれあい学級(0880) 31-1130★2023 年の干支「うさぎ」は
成長の象徴！？

干支（えと）が 12 種類の動物というのは常識ですが、なぜこの動物たちが選ばれたかの理由はあまり知られていないようです。「先着順で決まった」というのは、おとぎ話であって、実はもともと十二支は動物ではなく、季節に従って植物が変化していく様子を表す 12 段階「滋」「紐」「演」「茂」「伸」「巳」「件」「味」「身」「老」「脱」「核」が基で、やがてこれらに「音」や「韻」が似ている動物に置き換わり、それがネズミに始まる 12 種類の動物になったそうです。

この十二支と古代中国の暦法で順序や番号を表す「甲」「乙」「丙」「丁」「戊」「巳」「庚」「辛」「壬」「癸」の十干を足した十二支を指して「干支」というそうです。

この十干十二支で読む 2023 年は「癸卯」（みずのとう）にあたります。「癸」は順序でいえば上記にも示したように最後にあたりに、一つの物事が収まり次の物事への移行をしていく段階を表しており、また「卯」のウサギは「茂」という時期であり、繁殖する・増えるという段階にあたります。

その両方を備えた「癸卯」は、去年までで様々なことの区切りがつき、次へと向かっていく、そこに成長や増殖といった明るい世界が広がっていくと解釈することができるそうです。

まさに、新型コロナウイルスのパンデミックに襲われた世界が、これまでの経験を踏まえて、様々な対策が整い、「ウイズコロナ」の中で、安心できる新たな流れが生まれてくることを期待したいものです。

ちなみに、60 年前にあった前回の「癸卯」の年には、かの名作「鉄腕アトム」が、日本国

産連続 30 分テレビアニメ第一号として放映が始まった年でした。

さらに、超長寿番組「キューピー3 分クッキング」、超ロングセラー「日清焼きそば」等が世に出た年でもありました。

やはり、この「癸卯」の年に始まるものは、当たりが多い！？ のかもしれませんね。

果たして今回の「癸卯」の年には、何が生まれるのでしょうか……………。

★過去にあった「卯」年の出来事

◆1975 年（昭和 50 年）

ベトナム戦争が終結。「沖縄海洋博」が開催され、350 万人近くの入場者数を記録。

◆1987 年（昭和 62 年）

バブルの時代。臨時教育審議会が、第 3 次、第 4 次答申を発表。教科書検定制度の改革や情報化への対応が提言された。

◆1999 年（平成 11 年）

ノストラダムスの予言外れる？ 東海村の臨界事故発生。2002 年から全面実施となった学習指導要領（前学習指導要領）の移行措置が発表。「総合的な学習の時間」の創設に沸いた時代。

◆2011 年（平成 23 年）

東日本大震災、原発事故で甚大被害。3 月 11 日、午後 2 時 46 分、宮城県沖で国内観測史上最大のマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生。同 3 時半前後には大津波が次々と沿岸部を襲った。宮城、岩手、福島 の 3 県を中心に死者は約 1 万 5 8 0 0 人、行方不明者は約 3 5 0 0 人に上った。

日本女子サッカー代表「なでしこジャパン」が、ドイツで開催されたワールドカップ（W 杯）で優勝。

★まとめ

過去の「卯年」には、東日本大震災を除いて、ベトナム戦争が終結したり、教育界では、改革や提言がなされたり、新しい名称の時間が創設されたりと、先にも述べたように、まさに 一つの物事が収まり次の物事への移行をしていった年、これまでの、様々なことの区切りがつき、次へと向かっていった年でもあったような印象を受けます。

60 年ぶりの「癸卯」、2023 年はどんな年になるのでしょうか。

2019 年後半から繰り返し感染拡大の波が押し寄せ、変異株の発生等、新型コロナウイルス・パンデミックによって、「当たり前の日常」が失われてきましたが、ただ、そういった現実から数々の教訓を得て、立ち向かう力や新たな知恵が生まれてきていることも事実です。

そんな中、昨年の後半には、日本中を熱狂させた明るい話題がありました。カタールで開催されたサッカーワールドカップ（W 杯）では、「死の組」と評された予選リーグで、日本代表が W 杯優勝経験のあるドイツやスペインに逆転勝ちを収め、決勝トーナメント（16 強）に進出。

残念ながら決勝トーナメントでは一回戦で敗れましたが、監督や選手が言い続けてきたベストエイト（8 強）以上の「新しい景色を見る」という目標には、限りなく近づいてきているように感じました。

「思い続ける・発信し続ける」ことで、夢をつかんだり、夢に近づいたりすることができるようではないでしょうか。

今後も新型コロナウイルスの影響は、少なからず続いていくことは想定されますが、感染拡大に気を配りながらも、顔を上げ、前を向いて「できることの理由探し」に力を入れていきましょう。